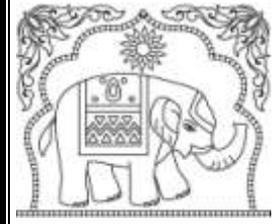


まいとりい मैत्री

No. 7 平成22年度 冬号 - 2010. 1. 1 -
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

～ 活動報告 ～

《観蔵院の曼荼羅美術館と萬燈会に参加して》

去る11月3日、練馬区の真言宗智山派寺院、観蔵院を仏教会・仏青会員9名とともに訪ね、併設の曼荼羅美術館を見学するとともに、同日行われた声明萬燈会に参加した。

曼荼羅美術館では御住職である小峰彌彦大正大学学長に御案内いただき、曼荼羅、ミティラー画、悉曇などを観賞。また、筆者は一昨年にも見学に来たことがあるが、そのときにはなかったミニアチュールの展示も増えており、虫眼鏡を貸していただき非常に細かな筆遣いまで観賞できた。また、ネパール人絵師ロク・チトラカール氏の色鮮やかな百八観音タンカ (チベット・ネパール風の仏画) も興味深く見学させていただいた。

その後、しばしお茶を飲みながらの談笑の後、声明萬燈会が行われる本堂へ移動。薄暗い中、無数の灯明が捧げられ、厳かに声明が行われた。声明で何を唱えているのか必死に耳を傾けたが、やはり真言の一部や「キンコウ (金剛、通常はコンゴウと読む)」と言っているのが理趣経かな? という程度しかわからなかった。

声明が終わり、すっかり暗くなった境内に出ると、上空に輝く満月と小道の両脇に揺らめく無数の灯明という光景が広がり、実に幻想的であった。



板野義弘 (大学院仏教学専攻 仏青会長)

【目次】

活動報告	……1	コラム「日本文化と仏教」⑥	……6
コラム「タイの仏教事情」	……3	書籍、イベント紹介	……7
コラム「仏教人物列伝」⑥	……4	今後の活動予定	……9



導師の様子



散華師の様子



魅入る会員達



萬燈会の様子

《チベット密教美術展》

11月8日に「山口先生と行く上野美術館探訪」に参加し、上野の森美術館で開催されている「聖地チベットーポタラ宮と天空の至宝」と東京国立博物館の平常展を鑑賞しましたが、今回は「チベット展」について報告したいと思います。

「聖地チベットーポタラ宮と天空の至宝」は、ユネスコの世界文化遺産に登録されているポタラ宮や歴代

ドライラマの夏の離宮だったノルブリンカなど各地の寺院や博物館からチベットの美術・文化の名品を集めた展覧会です。

展覧会は「吐蕃王国のチベット統一」、「仏教文化の受容と発展」、「チベット密教の精華」「元・明・清との交流」、「チベットの暮らし」という五つのテーマで構成されており、それぞれのテーマに合わせてタンカ、仏像、写本、法具、工芸作品、民族衣装などの様々な品が展示されていました。全出品数は123件(173点)で、そのうちの36件が一級文物(日本の国宝に相当)だそうです。

最初のチベット統一王朝の王ソンツェンガンポの像や、チベット仏教の祖師たちの像、頭蓋骨でできた法具(カパーラ)、また日本でもよく知られた不動明王、釈迦如来のタンカ、観音菩薩の像から、金剛界マンダラの五仏の像や密教の尊格であるカーラチャクラ、ダーキニーの立像、秘密集会タントラのタンカなどといった幅広い展示作品を先生に解説をしていただきながら二時間ほどかけて観てまわりました。

普段はなかなか見ることが難しいであろう品々をみることであったのはとても貴重な体験で、観音菩薩でも日本の仏像とは全く異なった表情をもった仏像や、髑髏のついた持ち物を持ち強くて少し恐ろしい雰囲気などをもった密教独特の尊格などを観る事ができ、興味深かったです。

また、展覧会を通してチベット仏教とチベットの歴史、生活、文化との深い結びつきについて知ることができとても楽しい時間でした。

(博士前期課程2年 藤森晶子)

～コラム「タイの仏教事情」①～

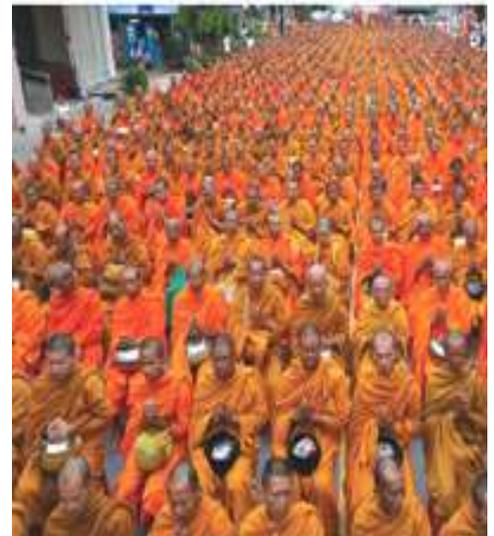
—タイの仏教基本情報・お正月の仏教行事—

東南アジアに位置する「タイ国」は微笑の国ともいわれる。このことに仏教の影響があることは疑問の余地がないであろう。釈迦牟尼世尊が悟りを開き、人々を教化し、入滅した後、さらにその教えが僧団によって、世界の各地に広められた。スリランカ、タイ、ラオス、ビルマに伝わった仏教は「南伝仏教」あるいは「上座部仏教」と呼ばれている。

一方、タイの仏教を「小乗仏教」と呼ぶ人が相当いるが、学問的に言うと、「上座部仏教」も「小乗仏教」と総称される「部派仏教」の部派の一つなので、必ずしも間違いとは言えないであろう。「小乗」とは「ヒーナヤーナ(hīnayāna)」を漢訳したものである。これは「小さく卑しい乗り物」という意味で、自分たちの考えが優れていると自負した大乘仏教徒の命名による賤称である。しかし、現在一般にタイ人はこの呼称にこだわらない。

現在、タイでは仏教徒の数が国民の95%を占めている。生まれてから死ぬまで、国王をはじめ普通の人々にいたっても、タイ人の日常生活は仏教に深く関係している。他の宗教でも、タイ人に理解させやすいように、仏教の言葉を借用して説明していることを見れば、タイは仏教王国であるといっても過言ではないであろう。

ところで、お正月になると、多くの日本人は寺院や神社へお参りに行くが、このめでたい時節に、タイの仏教徒たちはどのように過ごすのだろうか。これから順次、タイの生活様式を紹介してみたい。



タイでは、人々は自分の家の近くにある寺院の僧侶を招待し、食事を献上してから、読経してもらって（お経の内容については次ぎの機会に書こうと思う）、説法を受ける。多くの寺院も新年を迎える儀式を行なって、瞑想会、説法会などを開催する。

毎朝、僧侶が托鉢に出る姿は、タイではよく見られるような光景であるが、お正月になると、多くの地域で大托鉢式が行なわれる。その地域の県、あるいは区の中に住んでいる全員の僧侶を招待し、大勢の信者たちが集まって、各自用意した食事、生活の必需品を布施する。時には、一万人にもものぼる数多くの僧侶が集まったこともある。この行事に参加する外国人は、タイの人たちが持っている、仏教に対する信仰がどのような深いものであるかを実感できるであろう。



大学院仏教学専攻博士後期課程2年
プラチャッポン (Phramahachatpong Katapuñño)

～ コラム「仏教人物列伝」⑥ ～

ゴータマ・ブッダ その六

⑦ 転法輪 (初転法輪)

成道を経て菩薩はブッダとなりました。ですから今後は「釈尊」と呼ぶことにします。成道の後すぐに、釈尊の心は、自ら覚った法を他に説くことに向いたわけではありませんでした。最初の説法（初転法輪）に至るまでの数々の事績が種々に伝わっています。今回は梵天勧請までの経緯を、主にパーリの律蔵から受戒捷度の記述を中心にして見てまいります。

まず釈尊は成道後の第一週を、縁起を考察しながら過ごされたようです。これ以後の数週間、釈尊は自らの覚りを自ら味わっていました（自受法樂）。成道後 7 日後にアジャパーラと名のつくニグロード樹のもとに移り、成道後第二週をそこで過ごされました。その間には高慢なバラモンが「フンフン」とつぶやきながらやってきて「バラモンの資格」について釈尊に問いました。釈尊は「真のバラモン」の条件について独り言（ウダーナ）を発していますが、これはまだ説法ではなかったようです。



大雨が降ってきたためか、成道後 15 日目にして樹を移り、第三週はムチャリンダ樹のもとで過ごしました。ムチャリンダ龍王という大蛇が雨風から釈尊を守りました（左の写真はブッダガヤーの大菩提寺の南側にあるもの）。真偽のほどは別として、この時の大雨で池ができたそうで、ブッダガヤー出身のガイドによると、大菩提寺から南方に 1.7km ほど行ったところにあるモチャリン

(Mocharim) 村の北東辺にあるモチャリン池（次頁の写真）がそれであり、大菩提寺のものは偽物であるとのことです。

成道後第四週はラージャーヤタナ樹のもとにおりましたが、そこにタプッサとパッリカという名の二人の商人が到来し、釈尊に食事を供養してから仏法僧の中、未だ僧が成立していませんから、仏と法の二宝に帰依して最初の在家の信者（優婆塞）になりました。これが成道後最初の食事ということになりますから、釈

尊はほぼ一ヶ月間何も食べなかったということになります。一説によると、ずっと食べていなかったために、この食事で釈尊はお腹をこわし、近くに生えていたハリータキー樹に住む樹神がハリータキーの実を差し出して、これを食したところ具合が良くなったそうです。この果実はアーユルヴェーダでも整腸剤として用いられるとか。



さて第五週に入り、再び第二週と同じアジャパーラ・ニグロード樹のもとにおられたようですが、釈尊に「苦勞して得たこの覺りを人に説いたとて、誰も理解できなければ、徒勞に終わる」という考えが浮かび、釈尊の心は法を説かない方向に傾いてしまいました。

すると「これでは世界が滅びる」と考えたサハンパティという梵天（ブラフマー神）が、忽然と釈尊の前に現れて「塵垢の少ない、法を悟り得る類の人がいます。彼らも法を聞かなければ衰退してしまいます」と指摘します。釈尊は自ら仏眼をもってこれを確かめて、法を説くことを宣言しました。

この梵天とのやりとりは、梵天勸請と呼ばれ、様々に解釈されてきましたが、伝統的な一例を紹介します。

成道を経て一切知者となった釈尊ともあろう方が、梵天に言われるまで、法を悟り得る塵垢の少ない人もいるということが分からないようでは、一切知者の看板にいつわりありといえないでしょうか？——これは「一切知者」に対する誤解により引き起こされる質問です。一切知者といえども、一時に一切を知るわけではなく、何かを知ろうと思ってそれに心を傾けた時にはじめて、そのことについて知ることができるとされます。つまり、「法を悟り得る人がいるだろうか」と思考を向ければ、答えはおのずと分かるのですが、そこに思考を向けるきっかけが必要です。そのきっかけを与えたのが梵天とされるわけですが、一切知者の釈尊なら事前に、「法を説かない方向に心を向ければ、梵天がやってきて教えを説くように勸請してくれるであろう。梵天の勸請を受けてから説法を開始すれば、貪欲によって弟子を欲しがっているといった誤解を受けることを免れるであろう」と考えたのかもしれませんが。

次のような解釈も可能でしょう。梵天に勸請されなければ、法を説かない方向に心が傾いてしまった釈尊は、法を説かないまま入滅してしまうところだったという考え方です。もしそうなっていたら、「独りで覺り、法を説かずに入滅するブッダ」という、「正等覺者」とは別の範疇の聖者、つまり「辟支仏(ヒヤクシブツ)」（縁覺または獨覺という）で終わるところでした。ブッダたる者はみな、ブッダになるために梵天を必要とするということです（ただし後世の教学によればこのような考え方は否定されます。正等覺者と辟支仏とは最初から出来が違いとされるからです）。

ブッダが出世するのはたいへんまれなこととされますが、これは単にこれだけ尊い人はめったにいないというだけではなく、諸条件が満たされることも難しいからと思われれます。上のように考えれば梵天の勸請も必須の条件と言うことになりますが、たとえばブッダが出世するためには無仏の時代でなければなりません。しかも仏法が完全にすたれてその片鱗さえ誰も知らないということが重要です。誰にも教えられず、自ら獨り覺り（無師獨悟）、しかも法を説くというのが正等覺者（ブッダ）の条件だからです。ですから仏教が広まり伝わり、まだ残っている現在のこの地球には、どうしたってブッダは出世しません。「私は覺ったのでブッダだ」などと豪語する人がいたとして、そんな人は、きっと少しは仏教をかじっているでしょうから、すでにまねごとであり、このタイプは「声聞」ではあり得ても、獨覺でさえなく、ましてや正等覺者ではあり得ません。これだけ仏教がポピュラーな時代に「私はブッダだ」などと発言すれば、論理的に完全に破綻していることとなります。

最後に少々余談になりましたが、次回は法を説くことを決心した釈尊が、その後どのようにされたかを見て行く予定です。

岩井昌悟（東洋大学仏教会事務局長）

～ コラム「日本文化と仏教」⑥ ～

「老母の恋」

女性にとってはいつの時代も受難の歴史だった。現代のように自分の力で自活する道はほとんど皆無で、家に縛られ、その枠の中でしか生きるすべはなかったのである。男女差別、生活苦、自分の命を賭けなくてはならない出産、夫や子供との死別、孤独、愛情関係の葛藤、その苦しみの只中で、心のよりどころとして仏の教えにすがり、仏に救いを求めるのはいまよりはるかに切実であり、切羽詰まったものであったことはいうまでもない。

だが、いかに真剣に信心を望んでも、現実には、本格的な仏道修行や経典読誦は容易なことではない。それができるのは、ごく限られた身分で教養もある女性だけだったから、それ以外の庶民の女性たちに日々の暮らしに根づいた易行としての念仏が支持されるのは当然のことだった。

その結果、もっぱら声高に念仏を唱えることによって現世利益が得られるとする説話が数多くつくられるようになった。ことに浄土真宗寺院には、念仏を勧めるための談義や唱導の本がいまに伝わっている。その中の一つ『慈巧聖人神子問答』^{じこうしょうにんみこもんどう}は、大和国の慈巧聖人が廻国修行の途中、八幡宮の巫女の家で宿り、問答を通じて念仏門に帰依させるという内容で、作者や成立年代は不明ながら、南北時代には出来上がっていたとされるものである。

その中にこんな話がある。身分違いの恋に煩悶する一人の老女の話である。

彼女がいかにして救われたか？ まずはお読みいただきたい。

昔、一人の老女あり。年八十余にもなるであろうか。ある時、国王の御幸を見て、王に想いをかけ、それより食べ物もとらず、もの思いに耽るようになって日々過ごしていた。

この老女には息子が一人いて、その息子がどういう病なのかと母に子細を問うたところ、この母は泣く泣く答えた。

「わたしの病は特別な病気などではないのです。このような事は口に出して言うのはばかりある事ですけれど、言わずに秘しては後生も罪深き事ですので申します。私のような身分ではたとえ若くても叶うものではありません。ましてこれほど老衰して考えるべきではないことですので、天魔の狂わしなんでしょうか。ある時、御幸の折に国王を拝見してからというもの、なんとなく食べものも喉を通らなくなり、このようにすでに死門に近づいているのです」。

これを聞いた息子はむろんあつけにとられたが、母の真剣な様子が哀れでならず、懸命に思案した。親への孝養の願いであれば諸仏も菩薩もお聞き入れくださり、諸天善神も力を合わせてくださるというが、こればかりはいかにしても叶うとは思えない。しかし、これほど思い悩んでいては、なにしろ老衰の身だし、このままだと間違いなく死んでしまうであろう。しかたないからこの際いっそのこと、安らかに往生してもらうために念仏を唱えることを勧めよう。

そこで、「それはまったくたやすいことですよ」と母親に請け合い、竹の籠を一つ買い求めてきて、「智者が申されるには、この竹籠の縁まで満杯に念仏を唱え入れる人は、かならずや后になるとのことです。そんなに強く想っておられるのでしたら、やっpegおらんさい」と言うと、母親はどうにも常の分別がなくなっているので、もしやと、「たやすいことです、一心に念じながら唱えましょう」とその竹籠を受けとった。

さっそく籠の縁を口に当て、夜昼おこたらず、一心に乱れず念仏を唱えつづけて三七日たったその日、また国王の御幸があり、国王がなんとなく老女の家の方をご覧になると、金色の光明がその家の中から

輝き出して十方を照らした。

国王は不思議に思い、一人の大臣を遣わして見させたところ、「なんと、端巖美麗なる女人がおりまして、その光です」と報告したから、国王はますます不思議に思って自ら行ってご覧になると、たちまち目を輝かせ、心奪われてしまった。

女の顔はまるで満月のように、眼は青蓮のよう。白玉の肌は沈水の芳香をただよわせ、丹果(赤い実)のような口からは梅檀の息を吐いている。王宮内の后妃たちは皆、美女ぞろいだけれど、それと比べても玉と石ほどの違いではないか！

王はさっそく自分の輿に乗せて王宮に帰り、第一の后にお立てになった。

病を治して命を延ばすことは例があるけれども、老衰の姿を若く華麗に転ずるとは本当にありがたく、まことに類いまれなことである。仏法は不思議の力がおわす上に、阿弥陀仏の名号はことに不思議なりという。この話もなんの疑いがあるうか。
(現代語意識 永田)

どこの国の話か、とか、いつの時代のことか、といった野暮な詮索はこの際、意味がない。いくらなんでも荒唐無稽すぎやしないか、というイチャモンも、これまた無駄というものである。要は、この説話が女性たちの心を打つものであったか、心にどう響いたか、だけである。阿弥陀仏の功德のすごさに感激してますます熱心に念仏するようになったか、それとも、ばかばかしいと内心鼻白んだか、ぜひとも彼女たちのナマの感想を知りたいものだが、残念ながらといおうか、当然ながらといおうか、それを知ることができるような記録はない。

案外、皆で大笑いして、格好の憂さ晴らしになったのではなかろうか。少なくとも、日々の暮らしの苦しさも、嫁姑の諍いも一切関係ないから、嫁も姑も婆も娘も安心して聞いていられる。

婆がしぶい顔でわざとらしく咳払いすると、娘たちは顔を見合わせてくすくす笑う。みんな涙が出るほど笑い転げて、ひょうきん者のおかかが身をくねらせて老母の物真似なんぞし始め、次のお調子者が負けじと王様の役を買って出る。場はたちまち大騒ぎのにわか芝居もどきになって、唱導の坊さまは呆れるやらご立腹やら、「これこれ、おなご衆、いいかげんにしいや、罰あたりなこっちゃぞ」としかつめらしい顔でお説教を垂れようとするけれど、もはや誰も聞きちゃいない。

実はこれとよく似た話が『法華経直談抄』にもある。老女の年は八十歳ではなく「齢五十余」で、一人息子ではなく三人の息子の末子という違いがあるものの、それより大きい違いは、そちらは念仏ではなく、「法華(法華)の薬王品には一切衆生充滿其願と説けり。所謂此の文を少しも余念無く七日七夜の、これ、法力を以て満願すべし」として、法華経の功德をあらわす説話になっていることである。また『法華経鷲林拾葉鈔』にも類話があり、いずれも『法華経』薬王品の「充滿其願如清涼池」という文言による靈驗譚である。

いつの世も、人間界は苦しみ多いものだけれど、笑いがあれば、つかの間だけでも救われる。原典がなんであろうが、庶民はこういうかたちで仏の智慧を知るのである。

(大学院仏教学専攻博士前期課程二年 永田道子)

～ 書籍・イベント紹介 ～

《書籍》

・『はじめてのチベット密教美術』

正木昇/著

ポタラ宮をはじめ、シャル、コンカル・ドルジェデン、ペンコル・チューデの三カ寺を中心に、仏像と

壁画をとおして驚異のチベット密教美術の魅力を存分に伝える。世界初公開の写真を含むカラー図版93点。(春秋社 2415円)

・『**図解仏教がよくわかる 釈迦の生涯から各宗派まで、仏教早分かり事典**』

田代 尚嗣/著

釈迦の生涯から行事まで～早分かり仏教事典
 仏教の始祖である釈迦の生涯から、世界観、日本の
 仏教各宗派にいたるまで、豊富な図解とともにわかり
 やすく解説した仏教ガイド。(日本文芸社 930円)

・『**シャカ族 仏陀を輩出した一族に今なお伝わる
 仏教の原点**』

アジャヤ・クラーンティ・シャーキャ/著

お釈迦様の末裔シャーキャ(釈迦)族が、世界で初
 めて明らかにした仏教宇宙の精髓! 仏教の知られ
 ざる源流、ネパールに息づく文化・儀礼・哲学等を
 概説した画期的研究書。(徳間書店 1995円)

・『**日本仏教史入門 - 基礎史料で読む**』

山折哲雄・大角修/編

本書では膨大な文献史料のなかでも仏教にかかわ
 りの深い史料を厳選し、各時代の信仰のかたちを読
 み解く。日本仏教の流れを基礎史料からたどる、は
 じめての入門書。(角川学芸出版 2100円)

・『**バウッタ 仏教**』(再刊)

中村元・三枝充恵/著

バウッタ-サンスクリット語で「仏の教えを信奉す
 る人」の意である。二千五百年におよぶ歴史の中で、
 誤解と偏見に満ちた教学により誤伝されてきた釈
 尊の思想を展望する。(講談社 1470円)

— 仏教会会員コーナー —

・『**校注江戸黄檗禅刹記**』

木村得玄/著

黄檗派の祖、隠元禅師が渡来し、江戸にも黄檗派の
 寺院が建立されるに至ったが、当時は新寺の建立が
 禁止されていたため、他宗派の寺院を黄檗派の寺と
 して再興するという手段がとられた。本書は、これ
 らの寺院の様子を寺誌としてまとめたもの。写本は
 手書きで難読なため、注を付して、より読みやすい
 形にして刊行。(春秋社 5775円)

・『**日々是修行 現代人のための仏教一〇〇話**』

佐々木 閑/著

現代に生きる私たちにとって、ひたすら信じる救済

の宗教よりも、釈迦本来の合理的な教えの方が、む
 しろ馴染みやすい。そこに「生き死に」の拠りど
 ころがある。本書では、初期仏教の思想をベースに、
 生活に結びつく叡智を一〇〇話で紹介。

(ちくま新書 756円)

・『**阿修羅**』

梓澤 要/著

奈良・興福寺の阿修羅像に面影を刻まれた橘奈良麻
 呂。藤原氏の一族に生まれながら、その専制を憎み
 打倒藤原氏に立ち上がり、謀反の企ての罪で非業の
 最期をとげた苦悩の生涯を描く、壮大な古代ロマン。
 (新人物文庫 762 新人物往来社 762円)

《イベント》

～ 冬から春にかけて行われる仏教イベントです。～

・武蔵野大学公開講座

日曜講演会

平成 22 年 1 月 11 日 山田英昭「無量寿にかえる」
 平成 22 年 2 月 15 日 寺崎修「真宗と近代日本の知
 識人」

日時：毎月第3日曜 10:00

会場：武蔵野大学 5 号館 グリーンホール

お問い合わせ：042-468-3114

・チベット仏教普及協会(ポタラ・カレッジ)

新年法要 1月3日午後より

蔵暦正月の集い 2月25日 18:30より

月例法要 第4日曜 18:45より

瞑想教室 毎週日曜 15:15より

般若心経勉強会 毎週土曜 13:30 より
お問い合わせ：03-3251-4090

都電・京成・地下鉄「町屋駅」3分
問い合わせ：03-3813-6577

・仏教情報センター

仏教ホスピス、いのちを見つめる集い

病む者も健やかな者も共に<生・老・病・死>を語り
見つめ直す場として

1月 22日 我孫子虔悦 題未定

2月 26日 廣瀬郁実 題未定

3月 26日 服部順空 題未定

日時：第4木曜 13:30

会費：500円

会場：法典寺。六本木駅出口3から3分

*会場は4月から下記に移転します

泊船軒（臨濟宗寺院）荒川区荒川 7-17-2

・浄土宗総合研究所

シンポジウム

「崩れゆく葬祭のころーいま！問い直す『葬式仏教』ー」

基調講演：池上良正

「崩れゆく葬祭のころ」

シンポジウム：竹内弘道／井上治代／名和清隆／武田道生

日時：2月 20日 10:00～17:00

会場：増上寺 三縁ホール

問い合わせ：03-5472-6571

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。（会員は無料です。）

《東洋大学仏教青年会・仏教会総会》

日時：3月 27日（水）15:30～17:30

場所：6号館 3階 6310 教室

《定例全体研究会》

【内容】定例全体研究会では、毎回、仏教青年会・仏教会からの報告を行います。これに加え、渡辺章悟仏教会会長の講義「大智度論を読む」を開催します。時々外部から特別講師を呼んで、いろいろな話しをしてもらいます。参加希望者は岩井まで（tba.bussei@gmail.com）。

※講義資料は配布します。

【次回予定】

第8回 1月 27日（水）14:40 ～ 16:10 6号館 4階文学部会議室

第9回 3月 27日（土）15:30 ～ 17:30 6号館 3階 6310 教室

※2月はありません。3月 27日は総会です。

《語学勉強会》

※日程・場所については要確認。いずれの講座も初級者の参加が可能です。

○サンスクリット語読書会

「初等文法を兼ねたインドの宗教文献の読書会」

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日 13:00~14:30

内容：インドの説話文学の講読。初級者も参加可能。

- 1. バリバリコース（大学院進学を考えているような学生向け）
- 2. チャレンジコース（Skt.文を読みたいという学生向け）
- 3. オブザーブコース（インド文化に触れたいイン哲の学生以外の方向け）

※1~2はそれぞれの予習が必要ですが、3は予習など不必要です。 ※講義資料は配布します。

[次回勉強会]

日時：1月20日（水）13時~14時30分

場所：5号館2階セミナー室

※講義資料は配布します。当日いきなり現れてもOK

○チベット語仏典読書会

「ツォンカパのラムリム・チェンモを読む」

講師：石川美恵

日時：隔週月曜日 18:30~20:00

内容：初等文法を兼ねたチベット語仏教文献の講読。初級者も参加可能。 ※講義資料は配布します。

[次回勉強会]

日時：1月12日（火）18時30分~20時00分
※通常開催とは曜日が違います。ご注意ください。
場所：インド哲学科共同研究室（6号館4階）

※受講希望者は、板野義弘（nyorol@hotmail.com）までお願いします。

○漢文仏典講読会

「仏教漢文初歩—『観音経』を読む—」

講師：橘川智昭

日時：隔週木曜日 14:40~16:10

内容：特に仏教漢文の入門者を対象として、古来日本で親しまれてきた経典をとりあげます。また経文を通じて仏教思想の基礎を学びます。

[次回勉強会]

日時：1月14日（木）14時40分~16時10分

場所：5号館地下1階5B11教室

※時間・場所についての確認は、前日までに、kitsukaw@ff.iij4u.or.jp お願いします。

当日は、インド哲学科研究室前掲示板にてお知らせします。講義資料は配布します。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ（<http://www.toyo-ymba.org>）をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科2年 藤井明（東洋大学仏教青年会広報）

編集協力：文学部インド哲学科2年 高木俊次

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com URL: <http://www.toyo-ymba.org>

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 板野義弘

nyorol@hotmail.com